[head](koten.htm)（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、また、議論したことを、岩倉紙芝居館館主が独断で記載したものである。  
  
微子第十八

１）微子去之箕子為之奴比干諫而死孔子曰殷有三仁焉

wēi zǐ qù zhī jī zǐ wéi zhī nú bǐ gān jiàn ér sǐ kǒng zǐ yuē yīn yǒu sān rén yān  
微子は之を去り、箕子は之が奴と為り、比干は諫めて死す。孔子の曰はく、殷に三仁有り。  
  
微子は（殷を）去り、箕子は奴隷となる。比干は諫めて死す。孔子は、殷には三人の仁者がいると申された。  
■　箕・微は地名、箕は穀粒とワラ屑を選別する道具、微は“わらび”である。子は子爵の意味。暴虐非道の殷の最後の王、紂王の兄が微子。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/bisi.html)に曰く、「是は殷家の畿内の菜地の名なり。殷家の畿外の三等の爵は、公・侯・伯なり、畿内に唯だ子爵。而して箕・微の二人は竝（とも）に箕微の地を食（は）みて子爵なり。鄭玄尚書を注して云く、微子と紂は同母、微子を生むに當りて、母猶ほ未だ正しからず、紂を生むに及びて、時已に正を得て妻と爲る。故に微子は大にして庶、紂は小にして嫡なり。二人皆是帝乙の弟（子）なり。」「微子の名は啓、是れ殷王、帝乙の元子（長子）、紂の庶兄なり。殷の紂は暴虐、百姓（臣下）に殘酷、日月滋甚（じしん：益々はげしくなる）として、諫に從はず爭ふ。微子都（すべから）く國必ず亡（ほろ）び社稷は顛殞（てんいん：ころげ墜ちる）すとし、己身（自身）は元長（長子）たりて、宜（当然）係嗣（けいし：跡継ぎ）で存（あ）るも、故、先に殷を去りて周に投ず。早（すみやか）に宗廟の計を爲し、故に之を去るを云ふ。」「故に尚書に云ふ、微子乃ち父師に告げ、小卿が曰く、王子出んば、我乃ち顛躓（てんち：ころげつまづく）、是れ遂に去り敢て周に歸す、後微子を宋に封ず。以て殷の後と爲すなり。」  
殷を出奔しようとする微子が父師に助言を求めた。書経（尚書）に曰く、「王子（微子）よ、天毒（あつ）く災を降して殷邦を荒（ほろぼ）す。方（あまね）く酒に沈酗（ちんく：酒乱）興（す）。乃ち畏畏（ゐゐ：恐れかしこまること）すること罔（な）く、其の耇長（こうちょう：長老）舊（ふる）く位有る人に咈（たが）ふ。今殷民乃ち神祇の犧牷牲用（ぎせんせいよう：犠牲の動物）を攘竊（じょうせつ：盗み取る）するを以て容（ゆる）し、將に食ひて災無し（無災をとどまることがないと釈される）。降して殷民を監みるに、仇斂（きゅうれん：重税）を用乂（ようかい：治められ）し、敵仇（敵のごとく怨む）を召きて怠（や）めず。罪一（紂王）に合（あつ）む。多瘠（たせき：瘠せ細る）にして詔（つ）ぐること罔（な）し。商今や其の災有り。我興（た）ちて其の敗を受く。商其れ淪喪（りんそう：滅びてなくなる）し、我臣僕と為ること罔し。王子に出るを詔ぐ。我舊（もと）刻子（箕子）に雲（云：い）ひて迪（みち）びけり。王子（箕子）出ずるなと。我乃ち顛隮（てんせい：ころがり墜ちる：動顛していた）。（微子曰く）自ら靖（やす）んじ、人自ら先王に獻（たてまつ）れ、我顧ずして行遁（こうとん：逃げる）す。」  
■　箕子は伯父筋にあたる。狂人の振りをして、国を去った。義疏に曰く、「箕子は紂の諸父なり、時に父師と爲る。是れ三公の職、屡（しばしば）（紂を）諫めるも從はず。國必ず殞（そこな）ふを知りて、己身(自身)は長（子）に非ずが、輙（その都度）去ること能はず。職に任ぜられ寄(任務)重く、又死ぬ可（べ）からず。故に狂を佯（いつわ）りて囚を受け奴と爲る。故に「爲之奴」と云ふなり。鄭（玄）、尚書を注して云く、父師は三公なり、時に箕子奴と爲るなり。」  
周の武王が、殷を滅ぼした時、箕子を召し授かった殷の教えが「洪範（こうはん：大いなる法）」、その後箕子が東北で開いたのが朝鮮とされる。東夷が正直で従順と中国人にみなされた所以である。書経（尚書）、洪範、に曰く、「惟（こ）れ（文王受命）十有三祀(年)、王（武王）箕子を訪れる。王乃ち言ひて曰く、「嗚呼（ああ）！箕子。惟れ天、下民を陰騭（いんしつ：覆いつくして正す）し、厥（そ）の居を相協（しょうきょう：治める）せむ。我は其の彝倫（いりん：不変の正しい秩序）の敘（つい）づる（順序立てられている）攸（ところ）を知らず。」箕子乃ち言ひて曰く、「我は聞く、昔に在（おい）て、鯀（こん：禹の父）洪水を堙（ふせ）ぎ、其の五行を汩陳（こつちん：ごちゃごちゃに乱し並べる）す。帝乃ち震怒（しんど）して、洪範九疇（きゅうちゅう：九の分類）を畀（あた）へず。彝倫攸（より）て斁（やぶ）る。鯀は則ち殛死（きょくし）し、禹乃ち嗣いで興（おこ）る。天乃ち禹に洪範九疇を錫（あた：賜）ふ。彝倫攸（より）て敘（つい）づ。初（はじめ）の一（いち）に曰く、五行（水、火、木、金、土）、次の二に曰く、五事（貌、言、視、聴、思）を敬用す。次に三に曰く、八政（食：食料、貨：財政、祀：祭祀、司空：土木、司徒：教育、司冠：司法、賓：外交、師：軍事）を農用す。次の四に曰く、五紀（歳、月、日、星辰、歴数）を協用す。次の五に曰く、皇極を建用す（民に法を示し、守るものに五福を錫へれば、民も法を守る）。次の六に曰く、三德（正直、剛克、柔克）を乂用す（修める）。次の七に曰く、稽疑（けいぎ：大疑に自身の心、卿士、庶人、亀朴、筮朴に謀る方法）を明用す。次の八に曰く、庶徴（雨、陽、温、寒、風）を念用す（自然の運行と人事の関係を知る）。次の九に曰く、五福（寿、富、康寧：安寧、修好徳、考終命：老いて天寿を全うす）を向用す、六極（凶短折：幼児、未成年、結婚前に亡くなること、疾、憂、貧、悪、弱：病弱）を威用す。」  
■　比干は帝乙の弟、乙の子紂を諫めて殺された。義疏に曰く、「比干は亦、紂の諸父なり。時に小師と爲る、小師、是れは三孤の職なり*（三公三孤の如きは、周禮には皆載せず。或ひと謂く、公孤は兼官にして正職無し。故に載せず、と。然れども三公は道を論じ邦を經（おさ）む。三孤は公に貳（つ）いで化を弘む（周官）。殷から引き継いだ官職となろうか）*。進みて長適に非ず、宗の去ること存（あ）る無く、退きて臺輔（三孤）に非ず。佯狂の留を俟（ま）たず、且つ生くるに難く死に易し。故に、正言し極諫し以て割心に至りて死す。故に諫めて死すを云ふなり。鄭、尚書を注して云く、少師は大師の佐（輔佐）、孤は卿なり、時に比干この爲に死す。」史記、殷本紀に曰く、「比干曰く、「人臣たる者、死を以て爭はざるを得ず。」迺（すなは）ち強く紂を諫む。紂、怒りて曰く、「吾聖人の心七つの竅（あな）有ると聞く。」比干を剖（さ）きて、其の心を觀る。」

■　孔子が殷に三仁有りとした心は如何なるものか？夏は天より洪範を錫へられた禹の17代、桀王の時、湯に討たれて終焉した。殷は30代、紂王の時、武王に討たれて終焉した。共に末喜と妲己という美女に溺れ、諫言を容れず、徳ある家臣を幽閉し、その徳ある家臣に人望が集まり、討たれることになる。30代政権を維持した殷には、その最期にあっても、微子、箕子、比干等、孔子が仁者と称するべき賢人が居た。周はこの歴史を自省し、天命を自覚することを、くどいほど子孫に求めた。しかし、孔子の生きた時代、周自体がその使命を失って久しく、最期の殷にすら、三人の仁者がこれを諫めたというに、今や、覇権を求めて下克上、もはや天命を自覚する者はいない。そういう気持ちが込められたものではなかろうか。古注、何晏の曰く、「仁者は人を愛す。三人の行いは異なるに、而も同じく仁と称するは、其の倶（とも）に乱を憂い民を寧（やすん）ずるを在（むね）とするを以てなり。」義疏に曰く、「孔子、微子、箕子、比于を評して其の迹（あと）異なると雖も同じく仁と爲す。故に三仁有りと云ふ。然りとする所以は、仁以て世を憂ひ己身を忘れて用と爲す、而して此三人の事迹異ると雖も、倶に是れ世民を憂ふなり。然るに若し地を易へ處（おさむ）れば、則ち三人共互に能ふのみ。但だ若し去者有らずば、則ち誰が宗祀を保んじるや。佯狂者有らずば、則ち誰が親寄するや、死者有らずば、則ち誰が高臣の節を爲すや、各其の宜とする所を盡し、倶に臣法を爲す。教に於て益有り、故に仁と稱すなり。」[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に曰く、「三人の行同じからずして、同じく至誠惻怛（そくだつ）の意より出づ。故に愛の理に咈（もと）らずして、以て其の心の德を全すること有り。楊氏曰く、此の三人の者、各々其の本心を得たり。故に同じく之を仁と謂う、と。」

[読書会：2009年11月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月19日)

２）柳下惠為士師三黜人曰子未可以去乎曰直道而事人焉往而不三黜枉道而事人何必去父母之邦

liǔ xià huì wéi shì shī sàn chù rén yuē zǐ wèi kě yǐ qù hū yuē zhí dào ér shì rén yān wǎng ér bù sān chù wǎng dào ér shì rén hé bì qù fù mǔ zhī bāng  
柳下惠士師と為りて三たび黜（しりぞ）けらる。人曰く、子未だ以て去る可からざるか。曰く、道を直（なお）くして人に事（つか）ふ。焉（いず）くに往くとしてか、三たび黜けらるなくして、道を枉（ま）げて人に事へば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん。  
  
柳下惠士師（獄官）と為り三度罷免された。ある人が曰く、子（あなた）はまだ、（魯を）去ることができないのですか、と。曰く、政道を正して人に仕へるからです。どこに行くとして三黜されないよう政道を曲げて人に仕へるなら、どうして父母の邦を去る必要がありましょう。  
■　[衛霊公篇14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc))でみたごとく、臧文仲が柳下惠を用いなかったことを孔子が批判していた。集註に、「柳下惠は、魯の大夫展獲、字は禽、邑を柳下に食み、諡して惠と曰う。」とあった。孔子の百年前の魯の賢者。姓は展、名は獲。子禽、柳の下の邑に住んだので柳下、諡号が惠。同篇8)に、「柳下惠、少連は志を降し、身を辱かしむ、言、倫に中り、行、慮に中る。其れ斯れのみ。」とある。「あるとき爰居（えんきょ：鳳凰に似た鳥）という海鳥が魯の東門の外に３日間もいたので、臧文仲は民にこの鳥を祭らせた。柳下恵が「非理性的なるかな、臧孫は。 祭祀は国家の大切な制度であり、制度は政治の根本である。だから慎重に祭祀を制定して国法とするのだ。理由もないのに国法を増加するのは政治の道ではない」と言った。・・・柳下恵は下徳の君でも平気で仕えるし、どんなつまらぬ官職でもいっこうに恥じたりせず、推薦されて仕える以上は、ひたすら才智を傾けて働き、常に自分の信ずる道を行った。 また君主に見捨てられても別に怨みもせず、どんなに困っても少しもそれを苦にしなかった。また朝廷を去ろうとするときでも是非にと引き留められればそのまま留まった。孟子は柳下恵を評して「慎みが足りない。一方に偏っており、君子はそれに従わない」と言った（[列伝](http://www.h3.dion.ne.jp/~china/HUMAN9I.HTML#RYUUKAKEI)）。」とある。坐懐不亂という言葉がある。柳下惠が「遠くに出かけて帰ってくると街へ入るための門限を過ぎてしまった。そこで、門の外で寝ることとした。しばらくたつと、一人の女性がやってきて同じ場所で眠ろうとした。その晩はやたら冷え込み柳下惠は女が凍死するのではないかと危惧してその女性を足の間に座らせ自分の着物で覆ってやりあたためてやった。朝になり、淫らなことをしなかったので、従者も柳下惠の志の高さを喜んだ（[遠色類](http://www.moroo.com/uzokusou/nikki/121.html)）。」獄官（司法長官）としては誤解を招く行為であるが、惠と諡される所以であろう。■　士師は獄官とあり、司法長官。■　黜は退なり、とあり、罷免、免職すること。三黜は三度罷免されること。■　子は柳下惠のこと。人は或る人のこと、未可以去乎、可以はできる、未可以はいまだ出来ない。まだ（邦）を去らないのか。■　焉往　どこに行こうが　■　直道而事人焉往而不三黜枉道而事人、政道を正して仕えるなら、どこへ行こうが三度罷免されないことはないと釈するには、不不三黜と二重否定するか不免三黜とせねばならない、あるいは（必）三黜、どこへゆこうが（必ず）罷免される、でなくばならない。不三黜は三黜されないであり、前とつなげるのではなく、後とつなげ、三度罷免されず、政道を曲げて仕えるでなくばおかしい。■　父母之邦は魯のこと。  
[読書会：2009年11月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月19日)

３）齊景公待孔子曰若季氏則吾不能以季孟之閒待之曰吾老矣不能用也孔子行

qí jǐng gōng dài kǒng zǐ yuē ruò jì shì zé wú bù néng yǐ jì mèng zhī jiān dài zhī yuē wú lǎo yǐ bù néng yòng yě kǒng zǐ xíng  
齊景公孔子を待（たい）して曰く、季氏が若き則ち吾れ能（あた）はず。季孟の閒を以て之を待さん。曰く、吾れ老たり、用ひること能はず。孔子行（さ）る。  
  
齊の景公、孔子を待遇して曰く、季氏の若き（待遇）は吾は出来ないが、季孫氏と孟孫氏の間で待遇しよう。曰く、吾、老ひたり。用ひること出来ぬ。孔子は行（さ）った。  
■　齊景公（在位BC547～490）出生はBC574か573、父霊公が魯の宰相、叔孫喬如の娘、穆孟姫を夫人として娶ったのはBC575年。孔子が斉に渡ったのはBC517年、帰国が翌年あるいは翌々年。史記によれば、孔子は35歳で、「齊に適く。高昭子の家臣と爲り、以て景公に通ぜむと欲（おも）ふ。」とあり、おそらくは、高昭子の推挙により、景公が孔子に政（まつりごと）を問う機会を得、「君君、臣臣、父父、子子（[顔淵篇11](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）」などを進言し、景公は、「尼溪田を以て孔子を封ぜむと欲ふ」ところに至った、とされる。高昭子は景公の親書を魯の昭公に送達する役割を担い、昭公に対して大夫扱いの言葉遣いをした無礼者といわれ、孔子が高昭子にすり寄ったことを史記の間違いとする向きが多いが、35歳の駆け出しの孔子が景公の前に出るには、高昭子の存在は欠かせまい。国君に直々に進言をし、国君から任官の言葉を得たということは、孔子を政治の世界に引き上げる大きな一歩となったことであろう。■　待dàiは待遇の待、dāiで滞在する、止まる。魯における季氏となれば筆頭大夫であり、季孟之閒となれば、季孫氏、叔孫氏、孟孫氏の叔孫氏に当たり、「尼溪田を以て孔子を封ぜむ」どころではなく、斉の大夫のNo.2、となり、斉の家臣が受け入れるはずがなく、これはリップサービスと云ふほかない。景公は鷹揚な人物で、優秀な大夫に支えられておればその進言を容れよい政治が行えるタイプの君主で、晏嬰のごとき宰相に恵まれている間はよかった。■　吾老矣不能用　BC574 - BC517 =57　どこをとるかで二三年の違いが生じるが、景公は還暦に近いとされる。老年であるから用いることが出来なくなったというのは口実。史記によれば、宰相の晏嬰が景公を諫めたとされる。「夫れ儒者、滑稽にして軌法（きほう：手本）とすべからず。倨傲（きょごう）にして自に順ふ。以て下（民の手本）に爲すべからず。喪を崇（たうと）び哀（かなしみ）を遂げ、産を破（やぶ）り葬を厚くす。以て（斉の風）俗と爲すべからず。；遊說し乞貸（きつたい：財を乞い貸す）す。以て（孔子に）國を爲（おさめし）むべからず。大賢の息（や）みしより、周室、既に衰へ、禮樂缺（か）けて間（かん）有り。今、孔子、容飾を盛にし、登降の禮、趨詳（すうしょう）の節を繁くす。累世、其の學を殫（つく）すこと能はず。當年、其の禮を究むこと能はず。君、これを用ひて以て齊の俗を移さむと欲ふは、細民に先んずる所以に非ざるなり。」■　孔子行　次条も孔子行とあり、孔子が国を出る理由としている。

読書会：[2009年11月26日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年11月26日)

４）齊人歸女樂季桓子受之三日不朝孔子行

qí rén guī nǚ yuè jì huán zǐ shòu zhī sān rì bù cháo kǒng zǐ xíng  
齊人女樂を歸（おく）れり。季桓子之を受く。三日朝せず。孔子行（さる）。  
  
齊の人、女樂を歸（おく）る。季桓子はこれを受けた。三日、朝に出ず（政務を執らなかった）。孔子は（魯を）行（さ）った。

■　朱子は、歸guīとする。饋贈のこと。饋kuìとする本もある。■　史記に曰く（定公十四年（BC496）、孔子、年五十六）、齊の人、聞きて懼れ、曰く、「孔子、政を爲さば必ず霸たらむ。霸たれば則ち吾が地近からむ。我の先ずは並（あは）せられむ。盍（なん）ぞ地を致さむ（土地を与える）。黎鉏（れいしょ）曰く、「請ふ。先ず嘗（こころみ）にこれを沮（はば）まむ。これを沮みて可ならずば、地を致して、庸（なんぞ）遲きか。」ここに、齊の國中の女子の好き者、八十人を選び、皆、文（美しい）衣を衣（き）て康（こう）の樂を舞ふ。文馬三十駟（駟は4馬、合計120頭）、魯君に遺（おく）る。女樂、文馬を魯の城の南の高門の外に陳（なら）ぶ。季桓子、微服（人目につかない服装）して往きて觀ること再三、將に受く。乃ち魯君に語りて周道の遊（巡行）を爲す。往きて觀ること終日、政事に怠る。子路曰く、「夫子、行（さ）るべし。」孔子曰く、「魯、今且た郊（郊祭）す、如し膰（はん：祭肉）を大夫に致さば、吾、猶ほ止まるべし。」桓子、卒（つひ）に齊の女樂を受け、三日政を聽かず。郊すも、又、膰俎を大夫に致さず。孔子遂（つい）に行る、とある。左伝には、この話はみえない。論語のこの条から、上のような話が伝へられたのであろうか。三桓氏の武装解除に失敗し魯を出て放浪する孔子一行であるが、論語は季桓子や定公の政治に見切りをつけて、魯を後にしたとした。■　季桓子は季平子の子。定公五年(BC506) 、季平子が領地巡行の帰途亡くなり、その棺に陽貨が魯君が佩びる璵璠（よはん）という美玉を納めようとしたのを仲梁懐（ちゅうりょうかい）が止めた。陽貨が公山不狃に仲梁懐を追放するよう話したが、公山不狃はそれは君（わがきみ）のためを考えてのことととりあわなかった。葬儀が終わり、季桓子が費に巡行し、公山不狃が出迎えると桓子はこれに敬意を表した。随行していた仲梁懐を公山不狃が慰労すると、仲梁懐は公山不狃に敬意を払わず、怒った公山不狃は陽貨に仲梁懐を追放するよう頼んだ。陽貨は季桓子と従兄の公父文伯（こうほぶんぱく）を監禁して、仲梁懐を追放した。陽貨は季桓子、定公と盟を交わし、政権を握って。定公九年（BC502）季桓子の弟、季寤（きご）や公山不狃、叔孫氏で不遇の者等は陽貨に力を借りて、季桓子や叔孫武叔にとって代わろうとした。祭の後の宴で季桓子等を捕える計画であったが、孟孫氏の公斂処父（こうれんしょほ）がこれを察知し、季桓子は孟孫氏の邸に逃げ込むことができた。三桓氏は共同して陽貨を討ち、陽貨が斉に亡命することになった。この後、孔子が登用され、成果をあげ、司寇となり、子路が季氏の宰となる。孔子は定公の基盤を強化するために、三桓氏の武装解除を企図した。まず、叔孫氏の郈（こう）を武装解除し、子路を通じて、季氏の費に当たると公山不狃が曲阜に攻め入る反撃にあったが、この武装解除も成し遂げた。孟孫氏の成に関しては、公斂処父がこれを拒否し、これが落ちないことで、季氏、叔孫氏が合流し、孔子のもくろみは失敗に帰す。これが原因で孔子は魯を出ることになるが、論語の主張は上にみえ、孔子が魯の政治を見限ったとした。  
読書会：[2009年12月5日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年12月5日)

５）楚狂接輿歌而過孔子曰鳳兮鳳兮何德之衰往者不可諫來者猶可追已而已而今之從政者殆而孔子下欲與之言趨而辟之不得與之言

chǔ kuáng jiē yú gē ér guò kǒng zǐ yuē fèng xī fèng xī hé dé zhī shuāi wǎng zhě bù kě jiàn lái zhě yóu kě zhuī yǐ ér yǐ ér jīn zhī cóng zhèng zhě dài ér kǒng zǐ xià yù yǔ zhī yán qū ér bì zhī bù dé yǔ zhī yán  
楚の狂接輿、歌ひて孔子を過ぎて曰く、鳳兮鳳兮何ぞ德の衰たる。往く者は諫む可らず。來る者は猶を追ふ可し。已んなん已んなん、今の政に從ふ者は殆（あやう）し、孔子下りて之と言はんと欲す。趨（はし）りて之を辟（さ）く。之と言ふことを得ず。  
  
楚の狂接輿が歌って孔子の乗っている輿を通りすぎて曰く。鳳（孔子）よ鳳（孔子）よ、何と德の衰へたことよ、過ぎたことを諫める気はなく、これからのことは猶、追うべきであるが、やめたがいい、やめたがいい、今の政（まつりごと）に從ふことは危うい。孔子は輿から下りて、この狂と話そうとしたが、趨りさりそれを避けた。この狂と話すことはできなかった。  
■　[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/bisi.html)に曰く、「接輿（jiē yú：せふよ）は楚の人なり。姓は陸、名は通、字は接輿、昭王の時、政令常無く、乃ち被髮（髮を振り乱）し狂を佯（いつは）りて仕へず、時の人之謂ひて楚狂と為す。時に孔子、楚を過ぐ。」■　過孔子、孔子は輿（こし）に乗っており、歌って通り過ぎる。■　鳳兮、鳳は鳳凰、麒麟同様、徳の高い天子が出た場合に現れる想像上の霊鳥、ここでは孔子のこと、孔子に向かって歌っている。兮xīは声調を整える助詞、訓読の場合訳さないことが多い。鳳よ、鳳よ、孔子よ、孔子よと呼びかけている。■　德之衰、[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に曰く、「鳳道有れば則ち見われ、道無くば則ち隱る。接輿以て孔子を比これからできることを追う、接輿は孔子が昭王に仕官しようとしたことを咎めるつもりはない、これからできること、孔子が周公の政治を復活したいということを追うことはできるが、やめたがいい、やめたがいい、と呼びかけた。今の政治に携わるのは危うい、道がないのであるから隠れるべきと薦めていることになろう。この男は陸通、それが接輿と字（あざな）されたのは、孔子の輿に接したことによろう。狂人の振りをして、国を去った箕子が想起される。孔子もこれ以降、諸侯への仕官をあきらめており、それを象徴するものとして、ここに置かれたものかもしれない。莊子・人間世に、「孔子楚に適く。楚の狂、接輿其の門に遊びて曰く、鳳よ鳳よ、何如にぞ德の衰へたる。來世は待つ可からず、往世は追ふべからず。天下に道有らば、聖人成らん。天下に道無くば、聖人生きむ（隠れて生きる）。今の時に方（あた）りて、僅かに刑を免れんのみ。福は羽より輕く、之を載せることを知ること莫し。禍は地より重く、之を避くことを知ること莫し。已（や）まんか已まんか、人に德を以て臨むは。殆いかな殆いかな、地を畫（くわく）して趨（はし）るは（礼を以て導く）。迷陽（めいよう：バラ科でとげがある、孔子のこと）よ迷陽よ、吾れ行くを傷（やぶ）る無かれ、吾れ行くに郤曲（けききょく：曲がるにあわせて処す）すれば、吾が足を傷る無かれ。山木は自ら寇（こう）し、膏火（かうくわ）は自ら煎（や）く。桂は食すべし。故に之を伐（き）る。漆（うるし）は用うべし、故に之を割（さ）く（木は有用であるから自らあだとなり、油は有用であるから自ら燃やされ、桂は有用であるから切られ食され、漆は有用であるから割かれ塗料とされる）。人は皆有用の用を知るも、無用の用を知ること莫し。」とあり、孔子の楚での滞在時に、昭王に仕官して妙な政治をされては迷惑とばかり、結局は利用されて自らを破滅するだけだ、と皮肉ったことになる。して、其の隱るること能わざるを譏り、德衰えたりとす。來る者は追う可しは、言うこころは、今に及んでも尙隱れ去る可し、と。」孔子は楚の昭王に仕官したい気持ちがあった。しかし、これはうまくゆかなかった。楚を過ぐとは、通過であり、これから楚へ行くのではなく、その帰りと思はれる。接輿は狂を装って昭王の政治から逃れており、道が行われていないとする。道が行われている時に鳳は現れるものというのに、鳳たる孔子が道の行はれてない楚に行ったとは、何と孔子の徳の衰えたことか。■　往者、過ぎ去ったこと、過去。来者、来るもの、将来。往者不可諫來者猶可追已而已而は、過ぎ去ったことは咎めず、将来は追い求めることは可能かもしれないが、止めた方がいい。  
読書会：[2009年12月5日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年12月5日)

６）長沮桀溺耦而耕孔子過之使子路問津焉長沮曰夫執輿者為誰子路曰為孔丘曰是魯孔丘與曰是也曰是知津矣問於桀溺桀溺曰子為誰曰為仲由曰是魯孔丘之徒與對曰然曰滔滔者天下皆是也而誰以易之且而與其從辟人之士也豈若從辟世之士哉耰而不輟子路行以告夫子憮然曰鳥獸不可與同群吾非斯人之徒與而誰與天下有道丘不與易也

cháng jū jié nì ǒu ér gēng kǒng zǐ guò zhī shǐ zǐ lù wèn jīn yān cháng jǔ yuē fú zhí yú zhě wèi shuí zǐ lù yuē wèi kǒng qiū yuē shì lǔ kǒng qiū yú yuē shì yě yuē shì zhī jīn yǐ wèn yú jié nì jié nì yuē zǐ wèi shuí yuē wèi zhòng yóu yuē shì lǔ kǒng qiū zhī tú yú duì yuē rán yuē tāo tāo zhě tiān xià jiē shì yě ér shuí yǐ yì zhī qiě ěr yǔ qí cóng bì rén zhī shì yě qǐ ruò cóng bì shì zhī shì zāi yōu ér bú chuò zǐ lù xíng yǐ gào fū zǐ wǔ rán yuē niǎo shòu bù kě yǔ tóng qún wú fēi sī rén zhī tú yǔ ér shuí yǔ tiān xià yǒu dào qiū bù yǔ yì yě

長沮（ちょうそ）、桀溺（けつでき）、耦（ぐう）して耕す。孔子、之を過ぐ。子路をして津を問はしむ。長沮が曰く、夫の輿（よ）に執る者を誰と為る。子路が曰く、孔丘とす。曰く、是れは魯の孔丘か。曰く、是れなり。曰く、是れ津を知らん。桀溺に問ふ。桀溺が曰く、子をば誰とか為る。曰く、仲由とす。曰く、是れは魯お孔丘の徒か。對へて曰く、然り。曰く、滔滔（とうとう）たる者、天下皆是れなり。而して、誰とともに之を易（か）へん。且つ而（なんじ）其の人を辟（さく）るの士に從ふよりは豈（あ）に世を辟るの士に從ふに若（し）かんやと。耰（ゆう）して輟（や）まず。子路行きて以て告（ま）ふす。夫子憮然として曰はく、鳥獸は與（とも）に群を同じくす可からず、吾斯の人の徒と與にするに非ずして誰と與にかせん。天下道有らば、丘與に易へることなし。

長沮と桀溺が二人で耕作していた。孔子がそこを通り過ぎ、子路に船の渡し場を聞きにやらした。長沮は、あの輿で馬の手綱を執っているのは誰かと聞いた。子路が、孔丘と言うと、魯の孔丘か、と言うので、そうだと答えると、それなら渡し場は知っているだろう、と話を切った。桀溺に問うと、桀溺は、お前は誰かと聞く、仲由だと答えると、魯の孔丘の徒かと言うので、そうだと答えると、こう言った。滔滔とながれる、天下のもの皆そうだ。誰と共にこれを変えようとするのか？また、お前さん、人を避けて（仕官せぬ）士に從ふよりは、どうして世を避ける士に從はないことがあろうか。そう言って種を植えて土をかぶせる作業を止めようとしなかった。仕方なく、子路は孔子の所へ返り、そのことを孔子に報告した。先生は憮然として申された。鳥獸などと共に群れをなすことなどできるものか、私は、この人間という徒輩と共でなく、誰と共にできよう。天下に道が有るなら、私が共に変えることなどするものか。  
■　長沮桀溺、長は背の高い長人、沮jūは低湿の地のこと。人を賊し殺すこと多きを桀、最後夏の王が桀、溺nìはおぼれること、小便すること、niàoで尿のこと、溺尿niào suīで小便をする。集註は、沮は七余qī yúの反とするがqúとなる。が通常は、jū、子魚zǐ yūの反、zū。溺は乃歴nǎi lìの反nì。とする。農耕にふさわしい名であるが、対話の状況からすれば、農民ではない。子路とのやりとりからすれば、子路もその素性を高く評価する相手であった。接輿と同じく楚の政治に道のないことを憂へて、田舎に隠れた相応の政治家であろう。長沮、桀溺は字（あざな）であり、この故事にふさわしい字として付されたものであろう。集註は、「時に孔子楚より蔡に反る、津は濟渡の處とする、」とあり、楚の隠者とする。序説には、「楚の昭王將に書社の地を以て孔子を封ぜんとす。令尹子西可かず。乃ち止む」とある。仕官ならず、楚から衛へ向かう道中、前条の続きとなる。■　耦而耕、一人が鋤を打ち込み、一人がそれをひっくり返して土をはねあげる耦耕法（ぐうこうほう）と貝塚先生は注される。義疏は、当時の耒（耜）は巾が五寸で、一尺の畝を耕すのに二耜が必要なため、二人で耕しているとする。孔子と子路は作業中の二人のそばを通り、船の渡し場を尋ねた。船の渡しと人の世の渡し場がひっかけられている。■　執輿、輿は馬で引く馬車の輿（こし）、馬の手綱を孔子が握っている。子路の様子を眺めていたのであろうか。■　子路曰為孔丘、子路が農民に問われて、その名を言うことはない、せいぜい魯の孔子（孔先生）くらいのものである。いきなり、孔丘と本名で応へているのは、子路にとって、本名で応へざるを得ない相手であったからで、相手も平然と孔丘と呼び捨て、当然のことのように対話が進行している。子路も自身を仲由と本名で応へている。■　是知津矣、この二人は孔子と子路のことを知っていた。楚の昭王に用ひられず楚を去る途中にあることも知っていた。船の渡し場を聞いたのであるが、長沮はそんなことより仕官できなかった孔子の次の人生への渡し場、同じ仕官をまだ試みるのか、違った道を行くのか、それにより渡し場は異なるが、孔子はもうそれが分かっているだろうと、突き放したことになる。困った子路は、桀溺にそんなことより、渡し場はどこかと聞いた。■　滔滔者天下皆是也而誰以易之、桀溺は今度は、孔子の使いで来た人間を子路と確認して、お前なら言って分かろうものをとばかりに述べた。語順は天下皆是滔滔、大河が上流から下流に滔々と流れるごとく、人の世も流れている、その大河の流れを止めたり、逆流させることができないように、人の世の流れも変へることはできない。周が乱れ、春秋の覇者が現れ、その覇者も廃れ、戦国の下克上の世をむかへた。誰と共に之を変へようとするのか？今の世には周公のような諸侯はいない。昭王ならできると思って楚まで来たのだろうが笑止千万。■　且而、且（か）つ而（なんじ）。■　辟人之士、辟世之士、辟人之士とは孔子のこと、先王の道を復興せしむる諸侯などもはや居るはずがなく、結局その諸侯を避けて去ることばかりを繰り返す孔子の先はみえている。辟世之士とは道が行はれていないときには世を避ける人間のこと。楚の政治に見切りをつけた桀溺自身をさす。■　與～也豈若～、～せんよりは、どうして～するに若（し）かんや。桀溺は、ならぬ変革を心に抱く孔子より、私に従ひなさい、それがお前の身のためである、と迫った。■　耰而不輟、耰は種を蒔いて土をかけること、輟は事を途中でちょっとやめること。子路の反応がないので、桀溺は、農作業にかえり知らぬ顔で作業を続けた。仕方なく、子路は孔子のもとに戻り、事の次第を報告した。■　憮然、失意あるいは、怪しみ驚くこと。二人の隠者とおぼしき人間が、自分達の置かれた状況を的確に捉へていることを怪しみ、驚くと同時に、考えを改め、世は易へることは出来ぬから隠れろと先手をうたれ、子路が何も言へなかったことに苛立ちも覚えた。■　鳥獸不可與同群吾非斯人之徒與、は語順からすれば不可與鳥獸同群吾非與斯人之徒。[泰伯篇13](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taihaku.htm))に、「危邦に入らず、亂邦に居らず。天下、道有れば則ち見（あらは）れ、道無くば則ち隱る。」とある。接輿には危邦に入り、亂邦に居ろうとした、何と徳の衰えたことかと皮肉られ、今度は、仕官すべき諸侯はもはや居らぬ、道無くば隱るべし、と出鼻をくじかれた。世を捨て禽獣と群れて暮せとは隠者は言っていない。隠者とて人と一緒に生きる。問題は次の言葉にあった。■　天下有道丘不與易也、天下に道が有れば、共に変革することはない、と、孔子は子路に桀溺との違ひを明らかにせんと、言い訳がましく変革の意思を述べた。これは、道があればその力を発揮し、道なくばそこから去り、新たに道をなすべき諸侯を求めるという、これまでの行動原則とは異なる。長沮、桀溺はそこをどうするつもりかを突きつけていた。孔子が変革の意向を子路に示したことは、その後、衛での、霊公の後継者選びに影響を与えた。子路は、孔子に変革の意思があるとするなら、「輒（ちょう）、孔子を得て政をせまく欲す（序説）。」これがラストチャンス、この申し出に乗り、輒を補佐して政治を行うべしと迫った。しかし、孔子は、名を正すべしと、動かなかった。変革の意思ありといえども、輒を擁して自らの政治信条を具現するといふ政治行動にはでなかった。孔子自身ももはやそれは無理と、そこは長沮、桀溺の認識と一致していた。子路は、孔子が踏み切れないなら自らがと、その間（はざま）に飛び込み、結局、命を落とした。接輿、長沮、桀溺と字された三人は、見識高い政治家であったと思はれる。

読書会：[2009年12月17日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年12月17日)

７）子路從而後遇丈人以杖荷蓧子路問曰子見夫子乎丈人曰四體不勤五穀不分孰為夫子植其杖而芸子路拱而立止子路宿殺雞為黍而食之見其二子焉明日子路行以告子曰隱者也使子路反見之至則行矣子路曰不仕無義長幼之節不可廢也君臣之義如之何其廢之欲潔其身而亂大倫君子之仕也行其義也道之不行已知之矣

zǐ lù zòng ér hòu yù zhàng rén yǐ zhàng hè diào zǐ lù wèn yuē zǐ jiàn fū zǐ hū zhàng rén yuē sì tǐ bù qín wǔ gǔ bù fēn shú wéi fū zǐ zhì qí zhàng ér yún zǐ lù gǒng ér lì zhǐ zǐ lù sù shā jī wéi shǔ ér sì zhī xiàn qí èr zǐ yān míng rì zǐ lù xíng yǐ gào zǐ yuē yǐn zhě yě shǐ zǐ lù fǎn jiàn zhī zhì zé xíng yǐ zǐ lù yuē bù shì wú yì zhǎng yòu zhī jié bù kě fèi yě jūn chén zhī yì rú zhī hé qí fèi zhī yù jié qí shēn ér luàn dà lún jūn zǐ zhī shì yě xíng qí yì yě dào zhī bù xíng yǐ zhī zhī yǐ  
  
子路從ひて後（おく）れたり。丈人（じょうじん）の杖（じょう）を以て蓧（じょう）を荷（にな）ふに遇（あ）へり。子路問ひて曰く、子夫子を見るか。丈人の曰く、四體勤（つと）めず、五穀分たず、孰（だれ）をか夫子と為（せ）んと。其の杖を植へて芸（くさぎ）る。子路拱（きょう）して立つ。子路を止めて宿（しゅく）せしむ。雞を殺し黍（しゅう）を為（つく）りて之に食（くら）はしむ。其の二子を見（まみ）へしむ。明日、子路行きて以て告す。子の曰はく、隱者なり。子路をして反（かへ）りて之を見せしむ。至れば則ち行（さ）る。子路が曰く、仕（つか）へざれば、義無し。長幼之節、廢す可からず。君臣之義、之を如何ぞ。其れ之を廢せん、其の身を潔（けつ）とせんと欲して大倫を亂る。君子の仕るは、其の義を行はんと。道の行はれざる已に之を知れり。

子路がお伴をして遅れた。丈人が杖（つえ）を肩に竹籠をぶらさげているのに出会い、子路が尋ねた、「子（先生）はうちの先生を見かけましたか。」丈人は、「四體を使って農作業もせず、五穀の見分けもできず、孰を先生というのか」と言ひ、杖を置いて草を引き始めた。子路は手を合わせてじっと立っていた。丈人は、子路を引きとめ宿泊させ、雞を殺し、黍をつくり食べさせた。また、その二人の子を子路に挨拶させた（長幼之節）。翌日、子路は行きて孔子にそのことを話した。先生は、隱者だなと言ひ、子路に戻って会はせしめた。しかし、たどり着くと丈人は出掛けていた。子路は子供達に伝言をした。仕官せずば、義なし。長幼之節をやめずして、君臣之義をどうなされる。仕官しないからその身を潔しとするは、大倫を乱すこと。君子が仕へるとは義を行ふにあり、道が行はれておらぬは承知のこと。  
■　從cóngを去声としており、zòngは、陪臣する、お伴すること。子路がお伴をしていて遅れた。■　国事に当たる大夫は七〇歳になると君主より杖を賜り、どこででもその杖を使ふことが許された。丈人ということは、かつて大夫を勤めていた人間であることを示唆する。しかし、今や、朝廷を離れ、農事を行っているようであり、その杖に蓧（あじか）、竹で作った籠をぶら下げていた。杖は背丈くらいの長さがある。■　荷héは蓮、肩に担ぐはhè。■　子路問曰子見夫子乎、子路が子と呼びかけ、夫子と言えば、それが孔子のことであると分かっている丈人、大夫であり、孔子が隠者とするが、道が行われていないために田舎へ退いている人であろう。■　四體不勤五穀不分、両手両足が四體、勤の力は耒（すき）で農作業をすること、[五穀](http://www12.ocn.ne.jp/~nanyato/store/gokoku/index.html)は「麻・黍・稷・麦・豆『周礼』天官・疾医の鄭玄注」、「稲・黍・稷・麦・菽(豆類) - 『孟子』滕文公上の趙岐注」、「稲・稷・麦・豆・麻 - 『楚辞』大招の王逸注」麻の実を食用とする。黍はきび、あわより実がおおきい、稷は諸説あり、あわ、きび、こーりゃん、古くは穀物神、社稷は土地の神と穀物の神で国をあらわした。分は見分けること。■　植は説文に、「戸の植なり」とあり、戸を支える木、建物の柱から立てておくこと。植zhíを去声zhìと読ませており、置zhìの義。状況からすれば、蓧を下し、畑に杖を突き立てたとなろう。■　芸yìをyúnと読ませている、耘yún、除草をすることに通じる。芸はくさぎる、草を刈り、蓧に入れた。■　拱は、拱手、右手で左手のこぶしを軽く握り、胸元で上下する、丁寧な禮。丈人に敬意を表している。■　為黍而食sì之、食べさせること。■　宿はsùで宿る、xiǔで一宿、ひと夜、泊のこと、xiùで星宿、星座のこと。■　見其二子、見は賢遍反xiànとしており、二人の子にまみえしむ。■　子曰隱者也使子路反見之至則行矣、接輿の時と同じく、孔子はこの丈人と話してみたかった。孔子はこの時期、楚において隠者との接触を求めていた。諸侯への仕官をあきらめ、新たな方向性を模索していたのであろう。しかし、子路が戻り着くと丈人は出掛けており、[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「丈人子路の必ず將に復來らんことを意（おも）う。故に先に之を去りて以て其の跡を滅す。」とし、これは実現しなかった。■　不仕無義長幼之節不可廢也君臣之義如之何、仕へない（隠れる）なら、義はない。長幼之節の禮を行ひながら、君臣之義を行はないでは、一貫しない。丈人と話す余地はあるとみた。■　其廢之欲潔其身而亂大倫、集註は、「人の大倫五つ有り。父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り、是れなり。仕うるは君臣の義を行う所以。故に道の行なわれざるを知ると雖も、而して廢（す）つ可からず。然れども之を義と謂うときは、則ち事の可否、身の去就も、亦自ら苟（いやしく）もす可からざる者有り。是を以て身を潔くして以て倫を亂らずと雖も、亦義を忘れて以て祿に徇（つか）うに非ざるなり。」とする。道が行はれていないので仕へない、それを潔しとするが大倫を乱している。羊を盗んだとして父の罪を訴えるのを正直と褒めそやした葉公に、孔子は、親は子をかばい、子は親をかばふもので、そのなかに直を見い出すものでなければならない（[子路篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/siro.doc)）とした。父子間の「親」という大倫を乱すことなく、直であることを求めた。■　君子之仕也行其義也道之不行已知之矣、臣は君に仕へるもの、小人は道が行はれなくも禄のために仕へる、下剋上の世であり、野心ある者は道が行はれぬを利用してのし上がることもある。君が君の義を果たさぬことを嫌といふほど味わった孔子である。それを正すことの限界をも悟らざるを得ない所に来ていた。君が義を行はぬなら、臣はどうすべきか？我は君ではない、臣であるが君という人間に仕へることに拘泥されぬ。我は、君でも臣でもない君子を目指す、君子にとって仕へるとは、義を行ふことである。君臣ともに、よき政を実現することが本来あるべき姿である。道が行はれないのは、道のせいではない。義を乱すことなく、道のあるがままに人の世を生きる君子といふものを模索はじめた。孔子は隠者との接点を見出そうとした。しかし、ことごとく避けられた。孔子が昭公に仕官せむとしたことが、楚の政治から身を引いて隠れていた賢者にとっては、おおきな障害となっていたのであろう。  
読書会：[2010年1月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年1月9日)

８）逸民伯夷叔齊虞仲夷逸朱張柳下惠少連子曰不降其志不辱其身伯夷叔齊與謂柳下惠少連降志辱身矣言中倫行中慮其斯而已矣謂虞仲夷逸隱居放言身中清廢中權我則異於是無可無不可

yì mín bó yí shū qí yú zhòng yí yì zhū zhāng liǔ xià huì shào lián zǐ yuē bú jiàng qí zhì bù rǔ qí shēn bó yí shū qí yú wèi liǔ xià huì shào lián jiàng zhì rǔ shēn yǐ yán zhòng lún xìng zhòng lǜ qí sī ér yǐ yǐ wèi yú zhòng yí yì yǐn jū fàng yán shēn zhòng qīng fèi zhòng quán wǒ zé yì yú shì wú kě wú bù kě  
  
逸民は、伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。子の曰はく、其の志を降（くだ）さず、其の身を辱（はずか）しめざるは、伯夷、叔齊か。柳下惠、少連を謂はく、志を降し身を辱しむ。言（こと）、倫（みち）に中（あ）たり、行（おこなひ）、慮（おもんばか）りに中る。其れ斯れのみ。虞仲、夷逸を謂はく、隱居して言を放（ほしいままに）す。身、清（せい）に中り、廢（はい）、權（けん）に中る。我は則ち是に異り、可も無く不可も無し。  
  
逸民は伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。先生が申された。その志を降さずその身を辱しめなかったのは伯夷と叔齊だな。柳下惠、少連を、志を降し身を辱しめた、と謂ふが、言ふことは筋が通っており、行ふことは行き届いていた。そう（志を降し身を辱しめた）と云ふほどのものではないな。虞仲、夷逸を、隱れて（邦を出て未開の地に）暮らし、放言（昔のことを語らなかった）と謂ふが、未開の地にあっても身は清らかで（周の志は失はず）（周の慣習を）廢し（その地の風俗に同化した）ことはそれなりのやり方であったのだろう。私は彼等とは異なるが、可もなく不可もなし（似たり寄ったり）。

■　逸民は、逸脱の逸、ある状況を避けるために、出奔すること、その結果、無位の民となること。あるいはその言動が通常を逸脱し、超越した境地にあることを想定している。■　伯夷と叔齊については、[公冶長篇23](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm)）、[述而篇14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm))、[季氏篇12](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kishi.doc))にみた。義疏は、「夷・齊は、隱居して餓死す。是れ志を降さざる。亂朝に仕へざる、是身を辱めざる。是れ心迹（とど）まり倶（とも）に超逸す。己の心を直くし、是れ志を降（くだ）さざる。君の朝に入庸せざるは、是れ身を辱めず。」とする。■　柳下惠と少連、柳下惠は、[衛霊公篇14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/eireiko.doc)）、同篇2)にみた。禮記、雑記に、「孔子曰く、少連・大連善く喪に居る。三日(さんじつ)怠らず、三月(さんげつ)懈(おこた)らず、期（一年）に悲哀し、三年に憂う。東夷の子なり」とあり、孔子家語にもあり、「礼に達せる者なり」とされるが、吉川先生は、この少連とは断定できないとされる。どのように志をさげて、身を辱かしめたのかは不明である。道が行われていない所で仕官してその身を汚したのか？■　中zhòngで、～に当たる、中意は気にいること。中計は計略にかかること。言中倫は、言葉が倫、筋道に適ふこと。集註は、「倫は義理の次第（由来）なり。」とするが、徂徠は、そうでないとする。詩、正月（小雅、節南山）の「天の蓋（けだ）し高しと謂ふ。敢へて局さずんばあらず。地を蓋し厚しと謂ふ。敢へて蹐（せき）せずんばあらず。維（こ）れを號（よば）って斯(ここ)に言ふ。倫（ことわり）有り、脊（すぢめ）有り。*（天が高いのに背をかがめ、地が厚いのにぬき足さし足で歩く「政が乱れているさま」、こう呼ぶには、それなりの理由がある。）*」の倫といふ。樂記の「樂なる者は倫理を通ずる者なり。」、「倫を論じて患（うれへ）無きは樂の情なり。」、「樂行はれて倫清し。」の倫でもあり、書経、舜典、「無相奪倫」の「倫を相ひ奪はず*（神と人以て和す）*」の倫、「是れ樂に倫あり。絲（糸）は絲を以て終始し、竹は竹を以て終始し、匏は匏を以て終始し、歌は歌を以て終始し、各おの條理ありて紊（みだ）れず。是倫なり、人に五倫あるが如し、けだし、父子には父子の道あり、君臣には君臣の道あり、夫婦には夫婦の道ありて、得て同じうすべからず。是れいはゆる「倫」なり。」とする。合和する個性とでもいふべきもの。■　行xìng中慮は、行為が思慮に適ふ。集註は、「意義の人の心に合うこと有るを言う。」とする。徂徠は、「道は一槩（概）もて論ずべからず、一切に通ずる者あり、又一切に通ぜざる者あり、可なれば則ち仕へ、不可なれば則ち去るが如き。是れ君臣の大義にして、天下に通ずる者なり。柳下惠の言は君臣の大義にあらず、小徳の川流（せんりゅう）(中庸第三十章)」とする。「慮とは、委曲して以て行ひ、直遂（ちょくすゐ：真直ぐ進む）を以てせざるなり。柳下惠義を直くして以て行はず、乃ち委曲して以て道に合する者も、亦た暗に古聖人の慮に合するなり。其れ斯れのみは、此れ自(よ)りの外、別に称すべき者なきを言ふ」とする。■　其斯而已矣　徂徠の「委曲して道に合ふ」はひねりすぎであろう。世間では、柳下惠と少連を降志辱身と云ふが、その言行は筋が通り行き届いており、降志辱身といふほどのことではない。■　虞仲、夷逸、朱張、　夷逸、朱張は不明であるため、人名ではなく、虞仲が「夷逸し朱張する」とするむきもあるが、無理がある。虞仲の兄が泰伯（[泰伯篇1](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/taihaku.htm)）、司馬遷、周本紀に、「長子泰伯（太伯）と虞仲は、古公の季歴（末子）を立て以って昌（文王：季歴の子）に傳えんと欲するを知りて、乃ち二人荊蠻（けいばん）に亡（のが）れ如（ゆき）て、文身斷髪し、以って季歴に讓る。」とある。「呉世家」では仲雍。■　隱居放言、隱は虞仲が周を出奔して荊蠻の地に隠れたこと。古注では、「放は置なり、復（ま）た世務を言わず。」とし、口を閉ざしたとみる。周の出であることを語らなかった。身中清とは、辱身の反、荊蠻の地にあっても周の志を心の底には保っておられたとみる。廢とは、荊蠻に留まって周の風俗を断ち、その地の風習に同化したことであろう。權とは、「常經に反し、然るのちに善あるものなり（公羊伝：くようでん、桓公11年）」とあり、常道ではないがやむを得ざる正当な生き方（吉川先生）とする。言を放（ほしいままに）する、と読む説も多く、集註は、「仲雍吳に居り、髪を斷ち身を文し、裸を以て飾と爲す。隱居して獨り善くして、道の淸に合い、言を放にして自ら廢たること、道の權に合う。」とするが、虞仲の行為としては、古注がふさわしい。徂徠は、隠居は身を潔よくする、それは古聖人の一徳であるが、言行に見るべきがないので行でなく身とし、また、その廃絶することが聖人の權に合うとする。■　無可無不可、集駐は、「孟子曰く、孔子は以て仕う可きときは則ち仕え、以て止む可きときは則ち止み、以て久しかる可きときは則ち久しく、以て速やかなる可きときは則ち速やかなり、と。所謂可も無く不可も無きなり。」とする。孟子まかせで何がいいたいのかこれだけでは分からない。徂徠は、孔子がこのとき隠居をしていたとみる。集註には批判的で、「伯夷以下七人みな道行ふ可からずして隠る。孔子はこれと異り、道大にして徳宏し。ゆゑに孔子に在りては則ち道行ふべからざるの世なきなり。ゆゑに孔子の仕ふるは、必ずしも道の行はるべきを以てにあらざるなり。その隠るるは必ず行ふべからざるにあらざるなり。晨門曰く、「其の不可を知りて之を為（す）る者か（憲問篇）」。孔子曰く、「大臣は道を以て君に事（つか）へ不可なるときは則ち止む（先進篇）」。凡そ此の不可は皆道行ふべからざるを以て之を言ふ。」とする。徂徠は、孔子は、可であるか不可であるかに左右されず、道を行ふとする。馬融の注は、「亦他必ずしも進まず、亦た必ずしも退かず、唯（ひとえ）に善のある所なるのみ。」一歩高い境地にあるとする。孟子は以下にみるように、この七人を集大成をする人間が孔子とみている。孔子はこれらの人を逸民としている。自分は逸民ではないとする。伯夷、叔齊のように首陽山に閉じこもって餓死するようなことはしない。柳下惠、少連のように、何が何でも素知らぬ顔をして居座りつづけることはしない。虞仲のように異国（蛮夷）の風俗に同化するようなことはない。だけど、誰を可とし誰を不可とするようなものではない、それぞれに志がある。孔子は、極端を排し、人間の情を大切にするも、筋目は通っており、志を高くして、人間社会を生きる道を切り開くことになった。

孟子、万章下篇に曰く、「伯夷、目は惡色視ず、耳は惡聲を聞かず、其の君に非ずば事へず、其の民に非ずば使はず、治むれば則ち進み、亂るれば則ち退く、政の横（よこしま）なる所を出で、民の横なる所を止（や）む、居ること忍ばざる。郷人と處するを思ふは、朝衣、朝冠を以て塗炭に坐すが如し。紂の時當りて、北海の濱に居り、以て天下の淸なるを待つ。故に、伯夷の風を聞くは、頑夫（なまくらな者）は廉（潔く）し、懦夫（臆病者）は志を立てること有り。伊尹の曰はく、何ぞ事（つか）ふるは君に非ずや、何ぞ使（つか）はば民に非ずや。治むれば進む、亂るるも亦た進む。曰はく、天の斯の民を生むは、先知をして後知を覺らしめ、先覺をして後覺を覺らしむ。予は天（下の）民の先覺者、予は將（まさ）に此の道を以て此の民を覺らしむ。天下の民を思ひ、匹夫匹婦、堯舜の澤（恩沢）を與（とも）に被らざる者有るは、己を推して溝中に内す如し。其れ天下の重きを以て自ら任ず。柳下惠は汙君（汚君）を羞（は）ぢず、小官を辭さず、進みて賢を隱さず、必ず其の道を以てす。遺佚（見捨てられる）して怨ず、阨窮（困窮）して閔（うれえ）ず、郷人と處して、由由（ゆうゆう）然として去るを忍ばざる。爾（なんじ）は爾を爲し、我は我を爲す。我の側（そば）で袒裼裸裎（たんせきらてい：衣服を脱ぎ上半身裸になること：無礼を働く）と雖も、爾焉ぞ能く我を浼（けが）さむ。故に、柳下惠の風を聞くは、鄙夫は寛にして、薄夫は敦（あつ）し。孔子の齊を去るに、接淅（せつせき：といだ米を手にする：急いで）して行（さ）る、魯を去るに、曰はく、遲遲として吾行（さ）るなり。父母の國を去る道なり。以て速（すみやか）にす可きは速にし、以て久しくす可きは久くし、以て處す可き時は處し、以て仕ふ可きは仕ふ、孔子なり。孟子が曰く、伯夷は聖の淸なる者なり、伊尹は聖の任なる者なり、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なる者なり、孔子は之を集め大成するを謂ふ、集めて大成なるは、金聲（鐘の演奏）して之を玉振（磬の演奏）するなり（音楽を奏するごとし、智と聖を成す）。金聲（開始の音楽）なるは、條理を始むなり。之を玉振（終了の音楽）するは、條理を終へるなり。條理を始むは、智の事なり、條理を終へるは、聖の事なり。智は譬へれば則ち功なり、聖は譬へれば則ち力なり。由（なお）、百歩の外に射るは、其れ爾の力至るなり、其の中（あた）るは爾の力に非ざるなり。」  
読書会：[2010年1月16日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年1月16日)　[2010年1月23日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年1月23日)

９）大師摯適齊亞飯干適楚三飯繚適蔡四飯缺適秦鼓方叔入于河播鼗武入于漢少師陽擊磬襄入于海

tài shī zhì shì qí yà fàn gān shì chǔ sān fàn liáo shì cài sì fàn quē shì qín gǔ fāng shū rù yú hé bǒ táo wǔ rù yú hàn shào shī yáng jī qìng xiāng rù yú hǎi  
大師摯齊に適（ゆ）く、亞飯干楚に適く、三飯繚蔡に適く、四飯缺秦に適く。鼓方叔河に入り、播鼗武漢に入り、少師陽、擊磬襄海に入る。  
  
大師の摯は齊に適き、亞飯の干は楚に適き、三飯の繚は蔡に適き、四飯の缺は秦に適き、鼓の方叔は河内に入り、播鼗の武は漢中に入り、少師の陽と擊磬の襄は海に入って逃げた。

■　大師摯　「子の曰はく、師摯の始、關雎の亂、洋洋乎として耳に盈てるかな（[泰伯篇15](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/taihaku.htm)）。」師は樂官の長、摯はその人の名。朱子は、「師摯は、魯の樂師、名は摯なり。亂は、樂の卒章なり。史記に曰く、關雎の亂、以て風の始めと爲す。洋洋は、美しく盛んなる意。孔子衛より魯に反りて樂を正す。適々師摯官に在るの初めなり。」と注し、史記を引いて、孔子が放浪より魯に帰国してのこととみている。史記では、「子、魯の大師樂に語りて曰はく、樂、其れ知るべきなり。始め作すは翕如なり。これに從ひて純如なり、皦如なり、繹如なり、以て成る（[八佾篇23](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/hachiitsu.htm)）。」の会話もその頃とみている。義疏も、「魯君、道無く、禮樂、崩壞す。樂人、散走して所、同じからざる。」とし、これは、孔安國が、「孔子が目にした事実」と注している（吉川先生）ことにもよる。しかし、「子、齊に在し韶を聞く。三月、肉の味を知らず（[述而篇13](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/jutsji.htm)）。」孔子は若くして斉に亡命した際に、そこで、舜の樂、韶を聞いて感動している。魯より素晴らしい樂が斉で行はれていたことになる。大師摯が齊にもたらしたと釈すことができる。また、この篇では取り扱っている人物が過去の人々であり、広範囲に逃れていることからすれば、「清朝の毛奇齢が殷末に殷王朝を見捨てた楽師にあてた」、とする貝塚先生の解釈も肯ける。吉川先生は、後漢の班固が、古今人表、禮樂志に、「殷末周初」のこと、清朝の劉宝楠の論語正義を参照のこと、と注しておられる。義疏に、「古の天子諸侯H7240;必ず樂を奏す、毎食各樂人有り」とあり、飲食時に四飯（一の膳から四の膳）に及ぶ樂が奏されるとある。亞飯は二番目の食事とし、一日四食とする説もある、徂徠は、平旦食、晝食、哺食、暮食があり、それぞれに亞飯、三飯、四飯があるとする。また、禮記、特牲饋食禮に「尸三飯す」とあり、祭祀において、士は九飯、大夫十一飯、諸侯十三飯、天子十五飯、これは祭祀において尸に食を侑（すす）める際に奏するものといふ。■　亞飯干、集註は、「亞飯以下は、樂を以て食を侑（すす）むるの官。干･繚･缺は皆名なり。」とする。亞は二番目のこと。二番手の干は楚に逃れ、三番手の繚は蔡に逃れ･四番手の缺は秦に逃れた。集註は、張子の説として、「魯の益々衰うるに及んで、三桓僭妄し、大師より以下、皆散じて四方に之く」とする。■　鼓方叔入于河　鼓の演奏者が方叔で河は黄河、河内に逃れる。■　播鼗武入于漢　播bǒは揺らすこと、鼗は両袖に取手のある太鼓、揺らせば鳴るでんでん太鼓。奏者が武、漢は漢水、漢中。■　少師陽擊磬襄入于海　集註は、「少師は樂官の佐。陽･襄は二人の名。襄は卽ち孔子の從いて琴を學ぶ所の者。海は海島なり。」とする。

朱子は、「此れ賢人の隱遁を記し、以て前章に附く。然れども未だ必ずしも夫子の言にあらず。」この条は孔子の言葉とはみておられない。摯や襄が孔子と同時代の人ならば、孔子晩年の出来事であるが、この章の流れからすれば、殷末周初がふさわしい。いづれにせよ、樂人の禮が損なはれていることは、国の祭祀、制度が伝統に従って行はれていないことを物語る。殷末周初のことを孔子が引き合いにして、樂の危機について懸念を示された。「孔子季氏を謂ふ。八佾庭に舞ふ、是れ忍ぶべくば、孰れか忍ぶべからざらむ（[八佾篇1](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/hachiitsu.htm)）。」魯公にのみ赦されたことを家臣の季氏が行ふ。近頃は、魯公のお出来にならないことを季氏さまがおやりになる、たいしたものだと一般人はみていたのかもしれない。樂人にとっても奏する機会のあることはいいのかもしれないが、趣旨が異なるとなれば、孔子の心のみならず、演奏する樂人の心をも損なうものであったろう。衛から帰った孔子はなんとかそれを正そうとされたのであろう。しかし、樂人が逃散しては、如何ともしがたい。孔子の死後にそういうことが起こったのかもしれない。

読書会：[2010年1月30日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年1月30日)

10）周公謂魯公曰君子不施其親不使大臣怨乎不以故舊無大故則不棄也無求備於一人

zhōu gōng wèi lǔ gōng yuē jūn zǐ bú shī qí qīn bù shǐ dà chén yuàn hū bù yǐ gù jiù wú dà gù zé bú qì yě wù qiú bèi yú yì rén  
周公、魯公に謂ひて曰はく、君子は其の親を施（す）てず。大臣をして以（もち）ひざるを怨みせしめざる。故舊、大故無くば則ち棄てざる。一人に備はらんことを求ること無し。  
  
周公は魯公に謂ひて申された。君子は其の（直系の）親族をゆるがせにしてはいけない。大臣にしておきながら用ひず、怨みがのこるようなことがないように。旧縁のものは大きな過ちがなくば棄ててはならない。一人にすべてを求めてはならない。  
■　周公は周公旦。武王の弟。武王は殷の紂王を討ったが、二年たっても世は安定しなかった。伯夷、叔斉の案じたごとく徳に欠けた。箕子を招いて教えを請い、洪範を得たことはすでにみた。しかし、武王は、間もなく亡くなり、その子、誦（成王）が立つ。史記に曰く、「成王は少（わか）くして、周初めて天下を定む。周公は諸侯が周に畔（そむ）くのを恐れ、公乃ち政を攝行して國（政）に當る。管叔（かんしゅく）、蔡叔（さいしゅく）、群弟は、周公を疑ふ。武庚（紂王の子、禄父）と亂を作（な）し、周に畔く。周公は成王の命を奉じ、武庚、管叔を伐ち誅し、蔡叔を放つ（追放する）。微子開を以て殷の后に代はらしめ、宋に國せしむ。頗（ひたす）らに殷の餘民を收め、以て武王の少弟封を封じ、衛の康叔（こうしゅく）と為す。晉の唐叔（とうしゅく：成王の弟）は嘉穀（二苗で一穂をなす、和合の吉祥の禾）を得て、之を成王に獻じ、成王は以て周公に兵所（陣営）に歸（おく）る。周公は禾を東土に受け、天子の命を魯（の）ぶ。初め、管、蔡の周に畔くを、周公は之を討ち、三年にして畢（ことごと）く定まり、故に初めて大誥を作り、次きて微子之命を作り、次きて歸禾、次きて嘉禾、次きて康誥、酒誥、梓材、其の事は周公之篇（魯周公世家）に在り。周公、政を行ひて七年、成王長じ、周公は成王に政を反し、北面して群臣の位に就く。」周公は魯公に任じられたが、成王の補佐としてひたすら周の徳の涵養に心を砕かれた。■　魯公は周公の子、伯禽（はくきん）。魯周公世家に曰く、「周公、伯禽に戒めて曰はく、“我は文王の子、武王の弟、成王の叔父、我は天下において亦た賤しからず。然るに我、一沐に三たび髪を捉（と）り（沐浴中に士が来れば其の都度髪を整える）、一飯に三たび哺（ほ）を吐き（食事中に士が来れば其の都度食事を中断する）、起ちて以て士を待ち（待遇する）、猶ほ天下の賢人を失ふを恐る。子、魯へ之（ゆ）き、慎しみて國を以て人に驕（おご）ること無かれ。”」■　施shīは弛chíで、放置する。ゆるむこと。君子は其の親をゆるがせにしてはならない。徂徠は、孔安國の説として、「施は易也。他人の親を以て己の親を易（か）へず。」とし、韓愈の｢筆解｣に「施當（まさ）に弛に作るべし」を受け、朱子が「弛は遺棄なり」としたことを批判し、韓愈の「弛慢せず」を是とする。親は直系の親族。弛み慢心することがないようにする。義疏は、「施（ほどこ）さざるは猶ほ偏（かたよ）らざる、親とする所を偏り惠まざる」とし、直系親族のみを依怙贔屓しないこととなろう。親を遺棄しない、では意味がつながらない。■　不使大臣怨乎不以　以は用いること。大臣をして用いられないことを怨みせしめざる。集註は、「大臣其の人に非ずば則ち之を去（す）つ。其の位に在れば、則ち用いざる可からず。」とする。適材適所、相応しい人を大臣に任命し、任命すれば必ず用ふ。■　故舊　古くからの親族はよほどの過ちでなくば切り捨てず。古くからの朋友とする説がある。■　備　つぶさに、責難備至、非難があらゆるところから起こる。無求備於一人　一人の人間にすべてを求めること無いようにする。  
　武王の弟の菅叔鮮（周公の兄）と蔡叔度（周公の弟）は、降伏して周に従った武庚（禄父）と共に旧殷領を監視した。しかし、周公が誦（成王）を補佐して摂政となったことを疑ひ、二人は禄父を擁立して殷と繋がりがあった東部の淮夷と連合をして、謀反を起こした。この平定に三年を要した。首謀者の禄父と黒幕の菅叔鮮を処刑し、蔡叔度は息子の仲胡に家督を譲らせ、流罪とした。周公は殷を二分し､西部に武王の末弟の康叔封を封じ衛とし、東部に殷の賢者であった微子開を封じ宋とし、この地を安堵せしめられた。直系の兄弟の処遇の誤りから乱を招いた周公の苦い経験が交へられていよう。  
読書会：[2010年2月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年2月6日)

11）周有八士伯達伯适仲突仲忽叔夜叔夏季隨季騧

zhōu yǒu bā shì bó dá bó kuò zhòng tū zhòng hū shū yè shū xià jì suí jì guā  
周に八士有り、伯達（はくたつ）・伯适（はくかつ）、仲突（ちゅうとつ）・仲忽（ちゅうこつ）、叔夜（しゅくや）・叔夏（しゅくか）、季隨（きずい）・季騧（きか）  
  
周に八士有り。伯達・伯适、仲突・仲忽、叔夜・叔夏、季隨・季騧  
■　伯、仲、叔、季は長子、次子、次々子、末子。義疏に、「舊（ふる）く云く、周の世に一（ある）母有り、身に四つの乳にして此れ八子を生む、八子、竝（なら）びて賢し、故に之を記録するなり。侃案師（師の皇侃）、説きて云く、一人の四乳を謂ふに非ず、乳は猶ほ倶生（ふたつ）なり、一母にして四たび過して生む有り、輙（そのつど）雙二子を生み、四たび生みて、故に八子なり、何ぞ以て其の然を知る。就（まさしく）、其の名、兩兩（両方とも）相ひ隨ふ、是れ雙生者に似たればなり。」とあるが、集註は、「然れども考う可からず。」と疑問を呈している。

流れのなかでは、周公が、沐浴に際しても、飲食に際しても、三度にわたって中断して、士を遇し、見出そうとした故事に関連する。政（まつりごと）を行ふには、伯、仲、叔、季、長幼を限らず、適材適所の士を見出し、要職につけねばならないとする周公の執念がある。双子と言ふより、伯、仲、叔、季それぞれ二人で競わせ八子となし、八政（食：食料、貨：財政、祀：祭祀、司空：土木、司徒：教育、司冠：司法、賓：外交、師：軍事）に対する八士を想定する。その人材を得ることは、簡単ではない、周公のような人間が、本気で求め、それが遠くまで聞こへ、はじめて、士が集結してくる。  
読書会：[2010年2月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2010年2月13日)（大年夜）